

日風集

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉第117号 令和4年(2022)10月1日



高岡郡越知町下の谷 平成20年(2008)4月20日 武吉孝夫氏撮影

資料見聞

棚田の写真

「高知県の山村を歩く」

武吉孝夫写真集」より

「ウォーリーをさがせ!」という絵本があるが、このような風景の中では「お百姓さんを探せ」——そんなユーモラスな文章とともに、棚田の写真が『高知県の山村を歩く 武吉孝夫写真集』(令和4年10月7日、当館発行予定)に掲載されています。平野が狭い山村では、傾斜地に石積みした階段状の棚田で、米をつくってききました。写真は、あえての真横からのアングルです。階段状という棚田の特色はわかりにくいですが、画面いっぱい撮影された石垣の見事さが、一層印象深く迫ってきます。表現の面白さもさることながら、石積みをし、その手入れをして棚田を維持してきた山村の暮らしが端的に記録されています。

画面左下には、耕耘機で土を起こしている男性がいます。また、石垣を横切るビニールパイプが、田に水を送るために張りめぐらされています。それらは、かつて使われていた牛銚や竹樋が変化したものです。

そのように変わりつつ、代々毎年、農業がくり返されてきた棚田の、これは平成20年当時の写真です。

(中村)

企画展

武吉孝夫写真展 ―高知県の山村を歩く―

会期：令和4年10月7日(金)～12月4日(日)

中村 淳子

■写真の記録性

武吉孝夫さんは、かねてより写真の記録性を重視してきました。それは、『昭和51年・高知市を歩く』シリーズや『早春賦―四万十町誕生、今此処に―』などこれまで刊行してきた写真集にも如実にあらわれています。

武吉さんは四万十町で写真館を営むかたわら、撮影を続けてきましたが、60歳で区切りをつけ、カメラ片手に高知県の山村を訪ねる旅に出ました。平成19年(2007)から21年にかけての日帰りの写真旅でした。

企画展では、このときの写真で当時の山村の姿を紹介します。展示に併せて『高知県の山村を歩く 武吉孝夫写真集』を刊行いたします。

それらは、さながら高知県の「山村風土記」のようで、土地土地の歴史や地域性が、写された風景や人々の佇まいと、それらに添えられた文章から浮かび上がってきます。

また、写真集はもとより展示もまた章立ての無い長い「写真エッセイ」のようでもあります。人物写真や聞き書

きによって、私たちは個人的で普遍的な人生と出会うでしょう。

山村のおかれた状況は厳しく、過疎や老いにまつわる切ない話も多く、戦争や移民の体験の話も記録されています。そうしたつらい体験でさえもウイットに富んだ語りで伝える山村の人々の、たくましさや滋味あふれる美しさが伝わってきます。

■記録の方法としての「写紙」

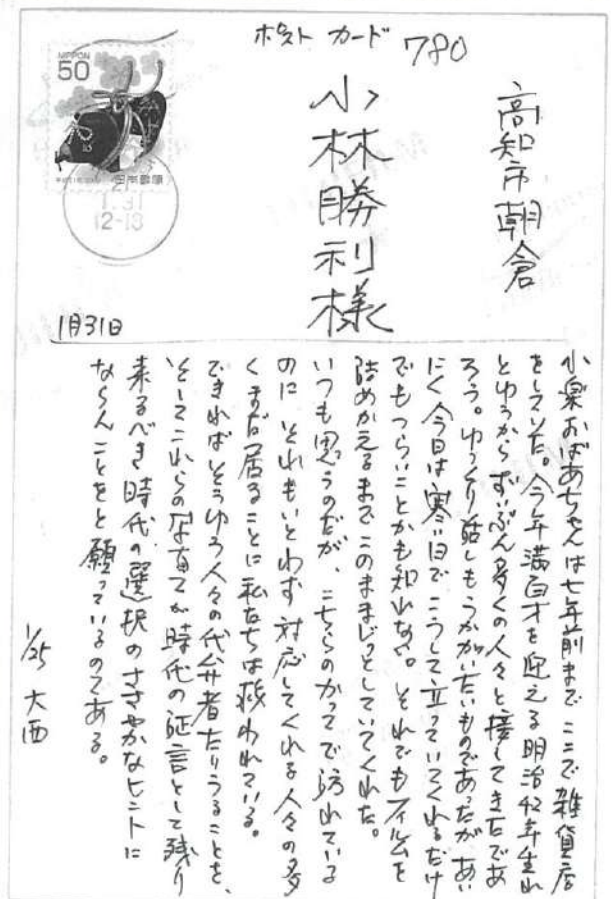
高知市を撮るときは高知市に住み込むまでして写真に取り組んできた武吉さんですが、今回は旅人として飄々と、しかし日常のあるがままを取材しようと、編み出したのが「写紙」です。

武吉さんの山村めぐりには、写真の朋友の小林勝利さんが同行しました。弥次喜多写真倶楽部の名刺を携えた3年間の撮影行に、小林さんは車の運転をかってでて、武吉さんを支えました。車中でも写真論等、充実した時間が共有されたことでしょう。

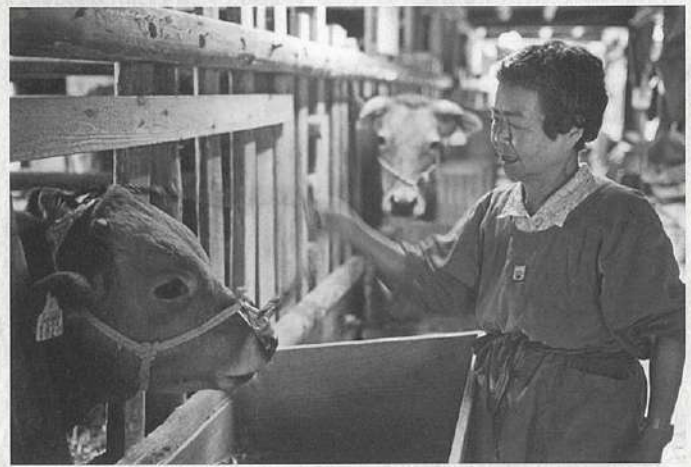
小林さんに宛てて毎日のように投函されたのが写真手紙、略して写紙でした。



写紙の写真は展示のためにあらためて暗室焼きした



写紙の文章は日を置かず下書きなしてしたためた



(右上) 四万十町河内 / (右中) 仁淀川町沢渡 / (右下) 梶原町上組 / (左上) 大豊町岩原 / (左下) 仁淀川町谷山

た。取材中に見聞きしたことや考えたことを書いて写真に添えた葉書です。

東洋町から宿毛市まで高知県の山村を巡った3年間に、小林さんに届いた写紙は千通以上になります。今回の展示は、その中から170通を取り上げて構成しました。

写真から伝わる情報は多く、視点を変えれば見えるものも変わるし、時代が変われば注目するものも変わります。記録する意図があればもちろんですが、意図を越えて写真が記録として力を発揮することもあるでしょう。こうした写真に撮影時の情報が書き添えられる写紙は、記録として有効です。

写紙については、10月23日(日)の対談「写紙の方法論」で、武吉さんと小林さんに語っていただきますので、どうぞご聴講ください。

■ 出会いと思索の旅

老いても思っても、何かしら充実した仕事はできるというのが、今回の展示で伝えたいことのひとつです。高知県の山村に暮らす高齢の皆さん然り、武吉さんたち然りです。その様子を見て今後の自分を考えたり、振り返ったりする機会になると思います。

山村の皆さんのいいお顔にも出会えます。他者との出会いと思索の深まりを求める方は、どうぞ展示会場で武吉さんの旅に同行してみてください。

武吉孝夫さん

高知県の山村を歩いて

■新たな写真ライフ

写真店を経営してきて60歳になったときに、そのまま続けた方が経済的には安定するけれども、写真家として、また社会性の観点からも、経営を縮小して積極的に取材に出た方がいいと考えました。

そこで取り組んだのが、高知県の山村の記録です。山村の現状の記録として貴重なものになるんじゃないか、思い立ったときにやっておかんといかんというのが、「発心^{はつしん}」でした。

営業写真と違ってお金にならない写



JR佐川駅ホームからスタートした山村巡り。向かって右から武吉さん、駅長さん、小林さん。撮影は汽車待ちのお客さん

真だけれども、写真集として残るわけやからね。後悔はしていません。

■なぜ山村だったのか

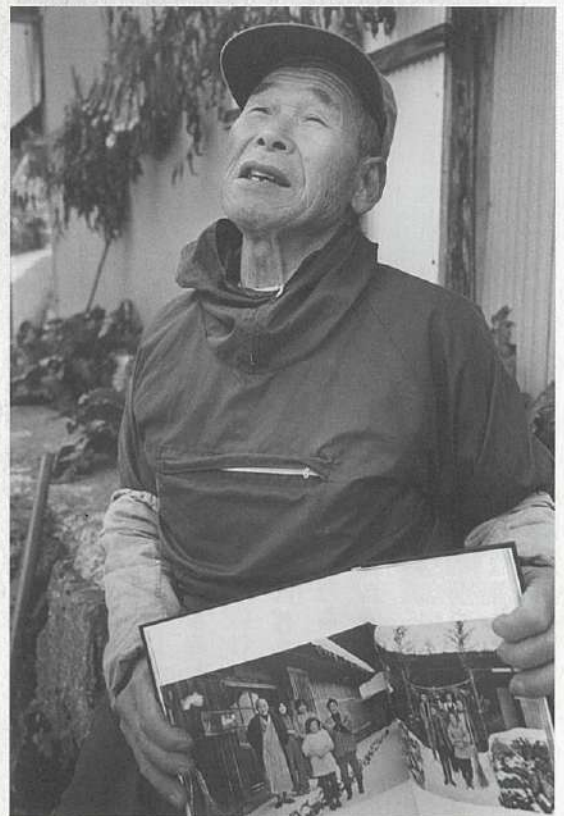
私は窪川（現四万十町）で生まれ、そこで暮らしています。都市ではないですね。中山間地域です。

若い頃、昭和51年（1976）のころですが、ひと夏アパートを借りて高知市を撮りました。それが地方都市の取材で、その後、山村の梶原町にも住み込んで撮影し、写真集「四万十川源流の里 津野山郷」を出しました。

その時に思いついたのは、何となくではなく、ある程度ものを考えて、何年かをスパンとして計画性をもって写真に取り組むということ。

そうした取り組みが前提になれば、一枚の傑作写真しか撮れない。一枚の傑作写真よりも、現実そのものが傑作だらけだから。記録したいという思いだけで傑作は向こうから飛び込んでくる。現代の真実が、カメラを向けた瞬間に入ってくるんです。

こちらの想いを塗り込めず、こうだからと決め込まずに撮る。というこ



武吉さんの写真集「四万十川源流の里 津野山郷」（南の風社 1986）を開き、「これがわしじゃ、50の時のう」と語る80歳のNさん。高岡郡梶原町文丸

とは、発想の新発見だね。自分も発見したいし、社会的にも発見もしたい。そういった姿勢でもって、平成19年（2007）から山村に通いはじめました。

空き家が増え、祭りも簡素化され、それまでは女性が参加できなかった祭りに女性が参加し、子どもがおらんになったからと大人が踊り出し、逆に青年がおらんになったからと子どもが参加して続ける、そういった状況だった。諸々の現代社会の歪みみたいなものが、山村で撮れるんじゃないか、記録としても残せるんじゃないかというように感じていました。

■取り組みとしての写真集

山村の記録は、当初4年計画でした。

4年あれば一仕事できるかなと思っていたところ、高知県は広いけれども3年で2回りでできました。さて3巡目というときに、高知市旭のご婦人方から展示の話が舞い込んできました。

旭がどんどん変わっていったからね。ご婦人方が町おこしの運動をはじめて、旭を考える手立てとして、私が昭和51年に撮った旭の写真を展示したけれど、展示は一過性だから、写真集にして残してもらいたいと皆さんから言われました。

そこで、旭の写真集を出して、高知市他の地域もシリーズ的に次々出してみたら爆発的に人気が出たのよね。何ちゃじゃない（土佐弁で「何でもない。大したことではない」の意）ものに対してこんなに反応があるのかと驚い

た。そちらが忙しくなったので、山村巡りは3年2巡でひとまず終えて、『昭和51年・高知市を歩く』を次々8冊出しました。写真の取り組みとして私は、写真集などの大きな塊を目指していません。

写真集刊行と並行して、昭和51年の写真をもとに平成の定点撮影をしましたが、これも3年かかりました。

その後、香美市立美術館から要請があつて、高知市の写真を中心に2回個展をしました。私の写真は、アートとは反対の際にある。けれど、現代アートの人から見ると、それが超アートだという。私は計算に入れてなかったけれど、町を記録した写真が、人びとの意識のなかに何かを呼び覚ます。それが超アートだということです。

■写紙による記録

写紙（本誌2頁参照）が、山村の記録に有効でした。写真の方法論でもあつたし、自己確認の手段にもなつた。写紙とは、自分に何かを課すことかな。人間って怠惰になる。多くは取材をしても取材だけ、写真も撮りっぱなしで終わるでしょう。

けれど、撮りっぱなしで終わらないように、取材の過程で見聞きしたことや考えたことを記録する方法として写紙をやってみようと考えました。

一緒に山村へ通う小林勝利さんに、「写紙を書き続けるべし」という意識していると取材にも熱が入りました。メモしてそのままにするのではなく、書き起こすことによつて考察もできる。文章を書くということは、考えるということだから。考えがより深くなるし、次の取材にもそれが活かされる。

■弥次喜多道中

小林さんは会社を退職して5年目くらいで癌の闘病中でした。気力がなくなつていたところを山村通いに誘つて焚きつけたのですが、よく応えてくれた。本当に感謝しています。

今度はどこそこへ行こうかというときに、小林さんは下調べをきちんとしてくれました。慎重な人だからね。出合い頭の瞬間を撮りたい思いもあつて、自分が行き当たりばつたりでした。

ふたりで山村に通つて出会つた人達には、記録するためという趣旨がちゃんと伝われば、拒否されることはありませんでした。けれど、たまに誤解されて嫌みを言われることもあつた。それは、ぶしつけに行つて写真を撮らせ、というのには失礼な訳ですから。

はじめはあまりの剣幕で何されるかわからんから帰つたが、もう一回行つてきちんと話をしたら相手が心穏やかになつて、苦勞した話をしてくれて、

「それを伝えてくれるのか」と、何を撮つてもいい、何を聞いても真つ直ぐに答えてくれたこともありました。

市井の人は、往々にして自分が言いたいことが世に伝わらない。その代弁者として話を聞いて記録し、生きた証を伝えたい。こちらの思いが伝わった時には、皆さん非常に協力的でした。



働き詰めに働いてきた90歳の手
香美市物部町菅明賀

■生きている実感

平成の高知市の取材後、海岸線を取材していた69歳のときに胃癌が見つかりました。末期で全身に転移して、もう終わりだと思つた。ところが医療センターで緊急手術し、抗がん剤を4年間飲み続けて完全寛解しました。

半年に一回は、念のため今も検査に通っています。医療センターの11階から、造成して住宅街か工業団地が出来つつある高知市の仁井田を記録して

います。これも幸いかなと、通院したときに撮っています。

76歳の今、生きている実感を味わっています。写真だけじゃなく、創作活動はそうしたものだと思ふ。絵を描いている人もそうだろうし。勤め人だつて実はそうじゃないかな。やりがいがあれば、苦しくても楽しい。精神的に満たされると思ふ。

どうしても襲い来る病気や身内の不幸、金銭的な問題や家庭の問題、いろんなものを抱えて人は生きている。私もすべてにおいて万々歳ではないけども、楽しみながら生きている実感はあるような気がする。これがずっと続けばいいけど、その内ちやがまらあ（土佐弁で「ダメになる」の意）ね。

■最後の取材

予土線が再来年で50周年。採算に合わない路線で廃線になる危機もあるが、地域の経済や暮らしを支えてくれてきた。私も通学でお世話になつた。

最後に取材したいのは、予土線です。駅まで歩いて、ぼこっと汽車に乗つて、今日はこの駅で降りようか。宇和島まで行つてみようか、駅の近くの食堂でうどんを食べようか、とね。

いい取材になりそうでしょう。

（聞き手 中村淳子）

仏像調査の現場から 〜四万十市 長法寺〜

那須 望

長法寺は、四万十市江ノ村の中筋川近くに所在する単立寺院です。今年5月、神奈川県立歴史博物館の彫刻史担当学芸員である神野祐太氏に調査指導を仰ぎ、長法寺が所蔵する毘沙門天立像（以下、長法寺像）の調査を行いました。ここでは、速報的に概要をお伝えしたいと思います。

長法寺像は、高知市の雪蹊寺が所蔵する毘沙門天立像（以下、雪蹊寺像）との類似が以前から指摘されてきました。雪蹊寺像は吉祥天立像と善膩師童子立像を従える三尊形式で、国の重要文化財に指定されています。足柄に墨書銘があり「法印湛慶」の文字が確認でき、この像を作った仏師が湛慶であることがわかります。湛慶は運慶の長男で、鎌倉時代後期に活躍しました。また法印とは、当時の仏師がみな持っていた僧としての位の一つです。雪蹊寺像の正確な制作年代は不明ですが、湛慶が法印に就いていた期間、すなわち建暦三年（1213）から亡くなった建長八年（1256）の間に造像されたと推定されています。

さて、今回の調査では、像全体を詳細に観察し検討した結果、ポーズや身

に着けているものなど多くの点で雪蹊寺像と共通することが改めて確認できました。また、構造は

いくつかの木材パーツからなる寄木造りで、首を抜くことができ、胴体の内部は空洞になっていました。ファイバースコープを用いて内部を観察したところ、墨書を確認し、その内容から本像は正安四年（1302）に仏師円海によって造像されたと判明しました。さらに、今回の調査の成果としては、

長法寺像は雪蹊寺像を模倣する意図が読み取れることから、長法寺像が造像された時期にはすでに雪蹊寺像が土佐にあり、よく知られる存在であったと考えられることがあげられます。つまり、雪蹊寺像の来歴を知るための手がかりの一つになるのです。また、仏師円海は黒潮町田ノ浦の飯積寺の本尊、十一面観音立像を正応四年（1291）年に制作した実績のみが知られていましたが、長法寺像が加わり、この時期に幡多地域で活動していた仏師の足跡が一つ増えたことも土佐の鎌倉期の彫刻史を考えるうえで大きな成果であり、大変実りある調査となりました。



撮影のようす

10回目を迎える旧大栃高校 民俗資料一般公開

梅野 光興

11月5日（土）、6日（日）の2日間、香美市物部町大栃の旧大栃高校に保管している民具の一般公開を行います。

当館では、狭隘により民俗収蔵庫に入らなくなった収蔵資料を、平成23年（2011）に、同校の体育館と格技場に移動しました。

これを物部や高知の民俗文化を見直すきっかけにできないかと考えました。物部には全国的に有名な「いざなぎ流」という民間信仰があり、当館でもこれまでに企画展を開催しています。いざなぎ流を再評価し、継承する機会を作ろうと、地域の方といっしょに「いざなぎ流と物部川流域の文化を考える会」を立ち上げ、いざなぎ流の公演や研究会を何度も開催しました。最近では地域の方が企画した「いざなぎ流御祈禱」展が奥物部美術館で開催され、当館も協力しました。

民具についても、せっかくなので公開してはどうか？と考えました。大栃に運び込む時に、民具を衣食住などの分類ごとに並べてみました。これで当館が集めた民具の種類と分量が一目でわかるようになりました。でも、展示ではないので「公開」としました。平

成25年（2013）に10回目を実施し、その後、地域のお年寄りやNPO法人、民具や生活文化に

関心のある人などさまざまな方のご協力を得ながら「モノベモノガタリプログラム」などその都度テーマを変えて約10年続けてきました。

ここ数年は新型コロナウイルスの影響で、お休みしたり、目玉の体験メニューが実施できていませんが、今年も去年に引き続き「ものべ民話と歴史の会」の協力を得て、「物部の妖怪」コーナーを設け、10回目の一般公開を実施する予定です。

高知県の民具の概要を知り、物部の文化にふれる機会でもある「旧大栃高校民俗資料一般公開」にぜひ足をお運び下さい。



2018年第7回旧大栃高校民俗資料一般公開

第13回「長宗我部フェス」開催決定！

開催日：令和4年11月19日(土) 10:00～16:00

言わずと知れたここ岡豊山は戦国武将・長宗我部氏の居城跡。今年も大分県から豊後大友宗麟鉄砲隊の援軍が！もちろん土佐長宗我部鉄砲隊も！煙舞ならぬ「演武」をご期待ください。ステージイベントのほか、館内ではミュージアムトークやワークショップ、岡豊城跡をめぐるスタンプラリーの記念品は「御城印」で、ガイドもあります。さらにグルメ屋台や戦国グッズ販売、今年は山村民家でもお楽しみが。さあ、戦国気分を満喫しよう！

関連講座

「長宗我部氏と山内氏

—長宗我部氏は「タブー視」されたのか?—

講師：当館学芸員 青井恵理香

日時：11月23日(水・祝) 14:00～15:30

要事前予約。要観覧券。定員40名



※11月19日は、イベントのため一般駐車場は使えません。高知駅、臨時駐車場【旭食品(株)】からのシャトルバス(無料)をご利用ください。

第17回岡豊山フォトコンテスト

作品募集と展示のお知らせ

岡豊山フォトコンテストの締め切りが近づきました。応募忘れはありませんか。「そういえば、桜の写真撮ったわ」、「民家で記念撮影したな」など、何気なく撮ったスマホの写真も応募対象です。今年も気合いの入ったカレンダーを作りますので、素敵な作品の応募をお待ちしています。



2022年フォトカレンダー

募集中

募集期間：受付中～10月23日(日)17:00まで

テーマ：岡豊山の春夏秋冬

募集内容：岡豊山で撮影した、岡豊山を撮影した写真で未発表の作品。

①一般部門 1人1点

②ケータイ・スマホ部門 1人2点まで

応募先：①高知県立歴史民俗資料館に持参もしくは郵送

②ホームページもしくはQRコードからメールフォームで

作品展示

展示期間：令和4年11月18日(金)から令和5年1月22日(日)9:00～17:00(最終日は15:30まで)

来場者の投票で「みんなのお気に入り賞」を選びます。

コーナー展「干支の玩具 卯」

会期 12月16日(金)～令和5年1月29日(日)

昨年度の寅で干支が一巡した郷土玩具の干支シリーズ。来年度後半は工事休館になることもあって一区切りの予定でしたが、うさぎの郷土玩具のあまりのかわいらしさに卯年も開催することに。郷土玩具収集家の山崎茂さんのコレクションを中心に、先輩の城田政治さんの優品などもご紹介します。関連企画の大人気、草流舎の皆さんによるうさぎ張り子の絵付も、今年は17日(土)と18日(日)の2日お席をご用意しました。

写真は12年前に展示した面々。今年はニューフェイスも登場します。素朴で愛らしいうさぎ玩具の大集合に、ほっこりキュンとくること請け合いですよ。



各地のうさぎ玩具

企画展「れきみんコレクション！

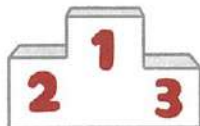
なんでもランキング」準備中

会期 令和5年1月2日(月・振休)～3月12日(日)

当館の収蔵品を大きさや長さなど一目見てわかる物差しでランキングしたり、学芸員の「押し」を紹介したり、普段とはちょっと違う切り口で紹介します。県民のみなさんに参加いただけるランキングもあるかも!?

展示機会の少ない資料やまじめな展示解説には書けない(?)個人的なお気に入りポイントなども紹介。歴史はちょっと苦手という方や歴史学習が始まる前のお子様にも楽しんでいただける内容です。

1月2日・3日に開催する「れきみんのお正月」と併せてご家族みなさんでお楽しみください。



第10回旧大栃高校民俗資料一般公開

11月5日(土)～6日(日) 入場無料

香美市物部町の旧大栃高校に保管している当館所蔵の民俗資料約2千点を年に一回特別公開。今年は「ものべ民話と歴史の会」による物部の妖怪コーナーもあります。

第13回 長宗我部フェス

11月19日(土) 10:00～16:00

この秋、岡豊城跡で火縄銃が火を噴く! 迫力満点の鉄砲隊演武など関連企画が盛りだくさん。

関連講座

「長宗我部氏と山内氏ー長宗我部氏は「タブー視」されたのか?ー」

講師: 当館学芸員 青井恵理香

11月23日(水・祝) 14:00～15:30

要事前予約。要観覧券。定員40名

刊行物のご案内

高知県の山村を歩く 武吉孝夫写真集

10月7日発行 定価 1,200円
B6変型判 288頁



企画展 武吉孝夫写真展

ー高知県の山村を歩くー

10月7日(金)～
12月4日(日)

武吉孝夫氏による記録写真の中から、過疎の波にのみ込まれつつも、たくましく生きる土佐の山村の人々の姿が写し出された作品を展示します。



企画展関連催し

① 講演会「変わりゆく山村」

日時: 11月26日(土)

14:00～16:00 先着60名

講師: 武吉孝夫氏(写真同人「現」会員)

いの町清水下分植川

② 対談「写紙の方法論」

日時: 10月23日(日)

14:00～16:00 先着60名

講師: 武吉孝夫氏(写真同人「現」会員)・小林勝利氏(同会員)

③ 担当者によるミュージアムトーク

10月22日(土)、11月12日(土)、20日(日)

各回とも14:00～14:30 ※すべて要観覧券、①～②は要事前予約

コーナー展 大坂の陣後の長宗我部氏

10月26日(水)～11月28日(月)

「長宗我部地検帳」(重要文化財)と「長宗我部友親氏寄託資料」を高知城歴史博物館から借用し展示。館蔵史料群と併せて、元親・盛親以降の長宗我部氏が歩んで来た歴史にも思いをめぐらす機会にしていきたいと考えています。

同時開催 長宗我部氏にまつわる武具を展示します!

れきみんのお正月

令和5年1月2日(月・振休)・3日(火)

お正月にちなんだ大人から子どもまで楽しめるイベントを開催。れきみんで新しい年をスタートしませんか。



コーナー展

干支の玩具 卯

12月16日(金)～令和5年1月29日(日)

山崎茂氏の郷土玩具コレクションを中心に干支の卯にちなんで全国各地のうさぎ玩具を展示します。



名古屋土人形

予告 次回企画展

れきみんコレクション! なんでもランキング

令和5年1月2日(月・振休)～3月12日(日)

当館の30年の歩みの中で蓄積してきた高知県の歴史や文化、暮らしに関するコレクションを楽しみながらご覧ください。



グリコのおまけ

岡豊風日(おこうふうじつ) 第117号
令和4年(2022)10月1日
編集・発行 (公財)高知県文化財団
高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-11
TEL 0888(862)2211
FAX 0888(862)2110
開館時間 午前9時～午後5時
休館日 年末年始12月27日～1月1日
臨時休館あり
観覧料 (通常展) 大人(18才以上) 470円
団体(20名以上) 370円
(企画展) 通常展示のみ 520円
団体(20名以上) 420円
無料: 高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳
所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者
保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所
持者とその介護者(1名)

印刷: 川北印刷株式会社

https://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール: rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp